



市議会経済建設常任委が視察

名寄 廃用牛肥育や雪堆積場 所管事業に理解深める

【名寄】名寄市議会経済建設常任委員会（奥村英俊委員長）の所管事業現地視察が、22日午後1時から市内各所で行われた。

この時期恒例の視察。今年は、二チロ畜産名寄工場の廃用牛肥育事業、新たな市民の雪堆積場、水稲生育、風連中央小学校の校舎・屋内運動場改築工事現場を視察した。

函名TPファームなどを視察した経済建設常任委員会

肥育事業は、地域ブランド牛の開発に向け、乳牛としての役目を終えたホルスタインの廃用牛を肥育し、肉牛に転化させるもの。廃用乳牛は一般的に、ひき肉となるのがほとんどだが、肥育することで肉としての価値を高め、ひき肉としてではなく、牛肉として市場で販売する。

同工場では既に、隣接する農業法人函名TPファーム株式会社と市内の飛騨野牧場に肥育事業を預託。市場で購入した廃用牛を一定期間肥育し、「名寄甘牛」として市場で販売するために商標登録を出願中で、地域のブランド牛として売り出していく考え。

函名TPファームの視察では、同工場の担当スタッフが「廃用牛に与える餌に大きな特徴がある。オレイン酸などを含んだアマニ由来の飼料で、脂の甘みが増し、肉質や味がよくなり、本来の肉牛と変わらない。価格は輸入と国産の中間程度」などと特徴を説明。

また、「乳牛飼育と比較して肥育は大幅に負担が少ないため、高齢で離農した乳牛畜産農家でも取り組める。飛騨野牧場が離農した際、肥育事業に承諾いただき預託した」と話した。

今後に向けて「現在、函名ファームで約120頭、飛騨野牧場で約40頭を肥育し、月20頭程度を出荷している。最終的には、高齢酪農家と協働で500頭を肥育し、月100頭出荷を目指したい」とした。

この他の視察では、市内西16南9に新たに購入した市民用の雪堆積場や、来年1月中旬に完成する風連中央小学校の新校舎を見て回り、状況を把握するとともに、理解を深めた。

(秋元)